

■ ソロモン王

ソロモンは、最も知恵あるイスラエルの王でした。しかし、彼は異国人の女性たちを妻として迎えました。このことは、してはならないと神様が言っていたことです。ソロモンが年を取った時、異国人の妻たちは彼の心を他の神々の方へ向けました。そして、ソロモンの心は真の神を離れ、偽りの神々に仕えるようになったのです。

ソロモンは、富と誉れを十分に楽しみました。しかし、神を離れた人生が空しいということを知りました。「伝道者の書」は、人生の一部を放とうとしたソロモンが、自分の罪を悔い改めて書き記した書物です。ですから、部分的に見ると、その内容は悲観的に見えます。

■ 聖書箇所の内容

「小さな町」と「大王」が対立しています。大王は、小さな町を取り囲み、攻撃のための万全の準備を終えました。一方、小さな町には特別な対策がありません。しかし、小さな町の人々が絶望している時、貧しい一人の知恵ある者が、自分の知恵を用いてその町を救いました。

■ メッセージのポイント

神様は、知恵を大切にすることを教えてください。知恵を持つこと、また、知恵を守ることが人間にとって大事であると言われます。知恵に関する三つの事を考えてみましょう。

(1) 世の中には二種類の知恵があります。

一つは、人間の間で通用する、この世の知恵です。世の知恵は、人生において便利なもので、多くの人々が重んじます。しかし、神様は、世の知恵が辛くて空しいものだと言います。

もう一つは、神を恐れる、天の知恵です。天の知恵は、人生において不便なもので、世に属した人々は軽んじます。しかし、天の知恵は、永遠の価値があるものです。

(2) 神を恐れる、天の知恵は、危機の中でもその威力を持ち続けます。

天の知恵は、人間の知恵や力で解決できない問題の中で、その威力を増します。

(3) 神を恐れる、天の知恵を守る時、その報いが与えられます。

すべての善悪を裁く神が、相応しく報いてくださいます。神を恐れる人にとって、この裁きは希望であり、主の栄光の現れです。